

## 芸術の表現活動に関する研究(2) 吹奏楽における演奏会についての一考察

著者	菅原 克弘
雑誌名	北翔大学生涯学習システム学部研究紀要
巻	12
ページ	17-22
発行年	2012
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1136/00000464/">http://id.nii.ac.jp/1136/00000464/</a>

芸術の表現活動に関する研究（２）  
—吹奏楽における演奏会についての一考察—

A Study of Expressive activity in Art（２）  
— A certain consideration about the Concert of wind-instrument music —

菅 原 克 弘  
Katsuhiko SUGAWARA

北翔大学生涯学習システム学部研究紀要  
第 12 号（2012）

## 芸術の表現活動に関する研究（２） —吹奏楽における演奏会についての一考察—

A Study of Expressive activity in Art（２）  
— A certain consideration about the Concert of wind-instrument music —

菅 原 克 弘  
Katsuhiko SUGAWARA

### １．背景と目的

幕末の1867年、薩摩藩が喇叭と太鼓と笛からなるイギリス式楽隊を組織したことから始まった我が国の吹奏楽活動は、1871年、陸・海軍に軍楽隊として吹奏楽の編成が組織されてからおよそ140年が経った今、その活動団体数は14,295団体（2010年度社団法人全日本吹奏楽連盟加盟団体数）を数え、様々な演奏活動が行われている。

本研究に先立ち「芸術と地域活動に関する研究（１）」（北翔大学短期大学部研究紀要第47号）において、吹奏楽は、移動しながら演奏することが可能な管打楽器のみによる編成で音量が大きく、最初に軍楽隊として組織された歴史的経緯からも、屋外での行進や式典での華やかで勇壮な音楽が特徴であるが、およそ100年前の1909年に京都府立第二中学校に吹奏楽が編成されて以降、職場バンドの台頭などアマチュアの吹奏楽活動が盛んになり、第二次世界大戦後の吹奏楽活動は学校教育における部活動を中心に活性化し、職場や一般社会人の吹奏楽活動もさらに広がりを見せ、同時に吹奏楽コンクールへの参加団体が増加するにつれ屋内での演奏活動機会が増え、今ではどの団体も定期演奏会をホールで行うなど屋内での演奏が主流となっていることを示した。

それらの吹奏楽活動の中でも中心をなす演奏会がどのように企画されどのように実施されているのか、またどのような傾向や特徴をもっているのかを明らかにし、目的や内容を整理・分類することにより、新たな吹奏楽の表現活動について考察を行うものである。

### ２．方 法

吹奏楽活動の発表の場である演奏会にはどのような種類があり、その演奏会を行う目的や具体的方法（時期や会場、曲目やプログラム構成など）を分類し、その違いを明らかにしていく。

【表１】（2010年度社団法人全日本吹奏楽連盟加盟団体数）

小学校	中学校	高校	大学	職場	一般	合計
1,125	7,188	3,792	331	88	1,771	14,295

先の1. 背景と目的で全日本吹奏楽連盟加盟団体数を14,295団体と延べたがその内訳は上記表1の通りであり、およそ87%が教育機関における活動となっている。

本研究では、筆者が1980年以降約40年間指導に携わってきた「北海道札幌東商業高校吹奏楽部」（以下札幌東商）と、同じく筆者が1972年以降約40年間にわたり演奏者として、また指揮者として関わりを持ってきた一般社会人による吹奏楽団体「札幌吹奏楽団」（以下札幌吹）、そして筆者が1990年以降約20年間にわたり指導に携わってきた「札幌市消防音楽隊」（以下消防音楽隊）の3団体を取り上げ、年間活動の実態と演奏会におけるプログラム構成の特徴を比較分類し、分析を行なう。

これらの分類、分析により、学校教育現場や社会人による一般吹奏楽団体、職業音楽隊との違いや特徴を明らかにし、新たな吹奏楽の表現方法について考察する。

### 3. 活動の整理と分類

中学・高校における吹奏楽活動の演奏表現は、大きく学校行事での演奏と地域からの依頼演奏、そしてコンクールや地区音楽会への参加、自主企画による演奏に分けられる。

札幌東商は1967年の創部で45年目を迎える歴史ある部活だが、筆者が関わる以前から、運営面を代表する部長と音楽面をまとめる生徒指揮者が中心となり執行部を形成し、生徒自身による自主運営を基本として活動している。

札幌東商における一年間の演奏活動を年度の始まる4月から翌年3月まで順を追って列挙すると、4月：対面式、ウエルカムコンサート、5月：壮行会、6月：高文連演奏会、7月：学校祭、8月：吹奏楽コンクール地区大会、9月：吹奏楽コンクール北海道大会、10月：体験入学での演奏、12月：クリスマスコンサート、1月：個人・アンサンブルコンクール地区大会、2月：予餞会、アンサンブルコンクール北海道大会、3月：卒業式、つくしっ子コンサートなど、年間10～12回程度の演奏場面があげられる。

対面式や壮行会、卒業式などの式典的学校行事は、その会の主旨・目的が明確であり、選曲もその目的に沿ったものとなる。またウエルカムコンサートや体験入学、予餞会といった行事での演奏は、対象となる新入生や中学生、卒業年次生にそれぞれ楽しんで頂くという限られた目的があり、演奏の場が盛り上がるかどうかは選曲の影響が大きいと言える。

一方、クリスマスコンサートやつくしっ子コンサートはホテルや大型商業施設などで行われており、季節にあった楽曲や聴衆となる方々の年齢層、その時々流行などにも注目し、コンパクトながらも演出などの企画を含めた総合的な演奏会を創りあげることが求められる。

吹奏楽連盟主催による団体コンクールは演奏会ではないので本研究の対象外とする。

高文連ではコンクール自由曲を取り上げる学校が多いが、札幌東商では定期演奏会を視野に入れたスタンドプレーの演出が効果的となる楽曲を演奏し、1年生を含む全員によるパフォーマンスを行なうことで、部活動の運営上、また定期演奏会のPR上も重要な場ととらえて演奏し

ている。

定期演奏会は1992年に第1回を開催して以来、21回（2011年現在）を数える。先に述べた日常活動の自主運営と同様に、定期演奏会においても、選曲・企画・演出・構成など全て生徒による自主運営で実施されている。

プログラム内容を見ると、第1・3回は第1部：クラシック編曲作品&オリジナル作品、第2部ポピュラー作品といった一般的な構成であるが、第2回目には組曲「道化師」全曲（カバレフスキー作曲）を取り上げ、ピエロ役の演技や影絵、ナレーションなどを入れた特別企画ステージを実施している。第4回以降は、第2部を特集ステージとして位置付け、全体を3部または2部構成としている。特集は「Joyful time」「Passio」「Old-Fashioned but Something New」「Cinema Shuffle」「Pop'n Roll Street」「アニメだよ！全員集合」などその年ごとにテーマを決め、そのテーマにあった選曲と演出で、毎年新たな内容を提供している。更に、第6回で行ったテーマに沿った曲でパート紹介を行う試みは第8回以降定着し、以降、毎年メンバーに合わせた編曲を自分たちで行い、衣装や演出を含め聴衆に楽しんでいただく工夫がなされている。

次に、札幌の場合を見てみると、演奏活動の中心は定期演奏会にあり、年に1回、基本的に10～12月に実施されている。その関係から、活動の流れは、1月：東区成人式の演奏で始まり、4月の新生児童会館入学おめでとうコンサートと市民バンドフェスティバル in Sapporo、7月の新生児童会館七夕コンサート、8月の吹奏楽コンクールと鉄東地区市民大運動会での式典演奏、10月の新生児童会館秋のコンサート、そして締めくくりの定期演奏会で集大成を迎えている。

札幌は1976年12月の創立であるが、2年目以降は札幌市東区の第三勤労青少年ホーム（現アカシア若者活動センター）や新生児童会館（東区北8東7）を練習場所として使用させていただいており、1978年以降、毎年東区成人式でのアトラクション演奏と式典演奏を担当している。また、新生児童会館では、毎年2～3回、児童会館利用者と近隣住民を対象としたミニコンサートを実施しており、子供たちから高齢者の方々に楽しんで頂けるプログラムとなるよう工夫している。更に、新生児童会館のある鉄東地区は町内会組織がしっかりしており現在でも市民大運動会を実施しているが、毎年そこでの式典演奏を務めさせていただき、入場行進曲やファンファーレなどを演奏している。

1978年以降、札幌市内の市民バンドが協力して実施している市民バンドフェスティバル in Sapporoに出演し他団体との交流を図るとともに広く市民への音楽提供を行っている。

吹奏楽コンクールには1977年から出場し、1982、1987、1990年には大編成の部で全国大会に出場し金賞2回、銀賞1回を受賞しているが、演奏会ではないので本研究の対象外とする。

一年間の集大成となる定期演奏会は、マーチ、アンサンブル、クラシック・ポピュラーの3部構成で1973年7月に第1回を開催した。第2～5回は第1部クラシック編曲作品&オリジナル作品、第2部ポピュラー作品といった一般的なプログラム構成で実施した。しかし、より良

い演奏をしようと考ええるとクラシカルな奏法とジャズを中心とするポピュラー奏法との違いに対応することが難しいと判断し、1978年にはクラシック・オリジナル作品のみによる定期演奏会とポピュラー作品のみによるポピュラーコンサートに分け年2回のコンサートを実施したが、一年に2回の自主演奏会は負担が大きいことから、翌年からはクラシック編曲作品とオリジナル作品のみによる年1回の定期演奏会を実施している。創立40周年を迎えた2011年まで、サクソフォン奏者やトランペット奏者、ピアニスト、クラリネット奏者、チューバ奏者、更には指揮者を客演に迎えた演奏会も数回行ってきた。また、創立20周年には伊藤康英氏に作曲を依頼し「未完のオペラへの前奏曲」を初演、更には作曲家・保科洋氏を客演指揮者として迎え、氏のオリジナル作品や編曲作品を演奏した。

一方、北海道ユーフォニアム・チューバ協会の依頼により「低音金管楽器の魅力in Hokkaido」や1990年開催の「ユーフォニアム・チューバ世界大会in Sapporo」において、世界初演曲を含むユーフォニアムとチューバの伴奏も行った。

次に、消防音楽隊は札幌市消防局の業務の一環として「市民と消防を結ぶ音のかけ橋」を合言葉に、音楽による広報活動を広く行っているが、その活動について述べる。

消防音楽隊や警察音楽隊、自衛隊音楽隊は、職業の一環として主に広報活動を主たる目的とする演奏活動を行う組織であるが、その活動形態は専務隊と兼務隊の2つに分類される。

専務隊とは、音楽隊としての演奏活動のみを専門に行なう組織のことで、兼務隊とは消防や警察、自衛隊の通常の仕事と兼務して音楽隊としての演奏活動も行なう組織のことである。札幌市消防音楽隊は兼務隊であり、札幌市内にある北海道警察音楽隊、陸上自衛隊北部方面音楽隊及び第11音楽隊はいずれも専務隊である。

消防音楽隊は1968年に発足し、奏楽隊員は火災・救急・救助・火災予防などの業務を担当する第一線の消防職員で編成され、カラーガード隊「リリーエンジェルス」とともに、コンサート・パレード・マーチングドリル・式典など、札幌市内で開催される公共的イベントに出場し、年間50件以上（平成22年度実績）の演奏活動を行っている。

活動内容は、消防局や消防団の行事での演奏、札幌市が主催・共催するイベントでの演奏、各地区町内会などからの依頼演奏、幼稚園や学校、諸施設等での防火音楽教室、そして大通公園や札幌市役所ロビー、札幌コンサートホールキタラでの119コンサートといった自主コンサートを行っている。

回数的に多くを占める式典演奏では華やかな行進曲やファンファーレ、厳粛な式典曲を演奏し、幼稚園や学校、諸施設等での防火音楽教室では音楽を楽しみながら火の用心や災害対策などの防火・防災を啓蒙できるよう、プログラム構成を工夫している。また、パレードやマーチングドリルでは、吹奏楽本来の軽快さや豪快さを感じ取って頂けるような選曲に心がけている。

119コンサートは、1987年2月に現在の札幌市消防局庁舎完成以来、消防局2階の市民ホールにおいて毎月1回平日のお昼休みに30分間開催していたが、市民への広報活動をより効果的

に実施するため、1992年より不特定多数の市民が集う大通り公園や市役所ロビーに出向いての演奏や、一度の演奏会でより多くの市民に聴いて頂くために市民会館などのホールで演奏することに切り替えていったことが、現在の札幌コンサートホールKitaraでの119ニューイヤーコンサートの開催へと発展した。ニューイヤーコンサートでは音楽専用ホールの特性を活かし、消防音楽隊の単独ステージと市民ゲストとのコラボレーションステージ、そしてマーチング演技を披露するステージドリルの3部構成で実施している。

以上のことを踏まえ、選曲から企画、構成、演出まで演奏会全体を創り上げる定期演奏会とニューイヤーコンサートについて比較し、吹奏楽における演奏会を通じての表現活動について考察する。

#### 4. 考 察

上記の3. 活動の整理と分類で述べたように、吹奏楽活動の特徴である野外での演奏活動は少なくなり、現在では屋内での演奏活動が主体となっている。野外での演奏は札東商においては0回、札吹においては運動会での1回であり、地域によってはこれに交通安全パレードなどが年1回程度加わるというのが、北海道における学校教育や一般の吹奏楽団体として一般的といえるであろう。消防音楽隊はその業務の特徴から、1月の消防出初式を始め、各種パレード、訓練大会や消防行事など屋外での演奏は年間10数回実施している。

現在、演奏活動の中で一年間の集大成となっている定期演奏会とニューイヤーコンサートについて比較してみると、それぞれの団体が何を目的にその演奏会を実施しているかを理解できる。

選曲とプログラム構成、特集・企画、ゲストについて比較する。

【表2】

	札東商	札吹	消防音楽隊
選曲	クラシック・オリジナル ポピュラー	クラシック・オリジナル	ポピュラー・マーチング
構成	2部	2部	3部
特集・企画	有	無	有（ゲストとの関連）
ゲスト	無	有（奏者・指揮者）	有（各種市民ゲスト）

選曲について考察すると、札東商が全てのジャンルから選曲している理由は、コンクールでの自由曲や技術向上などを視野に入れ名曲と呼ばれる作品に挑戦したいという思いからクラシック・オリジナル作品を取り上げており、自分たちと後輩である中学生にとって身近なポピュラー作品を取り上げることで自ら楽しみ同時に集客力を高めようという意識による。また、同じポピュラー作品でも、親たちの世代に馴染みある作品も取り上げることで感謝の意を表している。札吹は先に述べた理由からクラシックとオリジナルのみでプログラムを構成している。消防音楽隊は多くの市民に親しまれ愛されている演歌や唱歌、民謡、ダンスミュージック、ジャ

ズなど幅広いジャンルから選曲し、業務としての需要度を重視し、カラーガーズ隊のパフォーマンスにも工夫を凝らしたステージを創るため、ポピュラーとマーチングから選曲している。

構成、特集・企画、ゲストを比較すると、札幌東商は2部構成ではあるものの特集としてテーマを決め、それに沿った選曲を行い、更に自分たちのパートメンバーに合わせた編曲をしてパート紹介を行っている。ゲスト招いていない点も含め、自分たちがやりたいと考える演奏会を自分たちの手で工夫して創り上げることを重視しているからと考えられる。札幌吹においては、基本的に特別な特集や企画を持たず、オーケストラにおける一般的定期演奏会のように構成されており、またゲストも毎回招くわけではなくプログラム構成上適切と思われる範囲で効果的に取り上げられていることから、吹奏楽演奏を純粋に音楽的に鑑賞してもらうことを目的としていると考えられる。消防音楽隊においては、毎回市民ゲストとして多岐にわたる演奏家（団体）を招いているが、これは消防音楽隊を通じ札幌市内で活躍する音楽家（団体）を広く市民に紹介する意味もあり、札幌市の文化活動奨励にも一役買っていると考えられる。

以上のことから、吹奏楽団体における表現活動の場である演奏会の企画・構成はかくあるべしという定番はなく、演奏団体それぞれの活動目標や意義に沿った企画・構成を考え、その意図がより確実に効果的に聴衆に受け入れられるような工夫が必要であると考えられる。誰を対象に、何を伝えるために行う演奏会なのかをしっかりと踏まえた企画・選曲・構成によるプログラムと、それを的確に表現する技術と音楽性を持ち合わせることが重要であり、それらの相乗効果によって多様なニーズを持つ聴衆からも共感を得られるような表現力豊かな演奏会が可能になると考える。

## 付 記

本研究は平成22・23年度北翔大学北方圏学術情報センター研究費の助成を受けて実施した。

### 【参考文献・DVD】

- ・教育音楽小学版別冊「音楽を生かす集会・行事の運営と指導」（音楽之友社）1983
- ・バンドジャーナル別冊「ザ・シンフォニック・バンド」Vol.4（音楽之友社）1991
- ・バンドジャーナル別冊「市民吹奏楽団ガイドBOOK」（音楽之友社）1994
- ・バンドジャーナル別冊「ポップス演奏が主役!! ジョイフル・ステージ」（音楽之友社）1998
- ・北海道札幌東商業高等学校吹奏楽部定期演奏会プログラム&CD・DVD・ビデオ（第1回～第21回）
- ・札幌吹奏楽団定期演奏会プログラム&CD・DVD・ビデオ（第1回～第38回）
- ・札幌市消防音楽隊119ニューイヤーコンサートプログラム&DVD・ビデオ（2000～2011）